

2

Sustainability

Hondaのサステナビリティ

2 Hondaのサステナビリティ

- > 基本的な考え方 04
- サステナビリティマネジメント体制 05
- マテリアリティ 06
- ステークホルダーエンゲージメント 07
- Hondaの取り組みとSDGs 10
- 外部からの評価 12

基本的な考え方

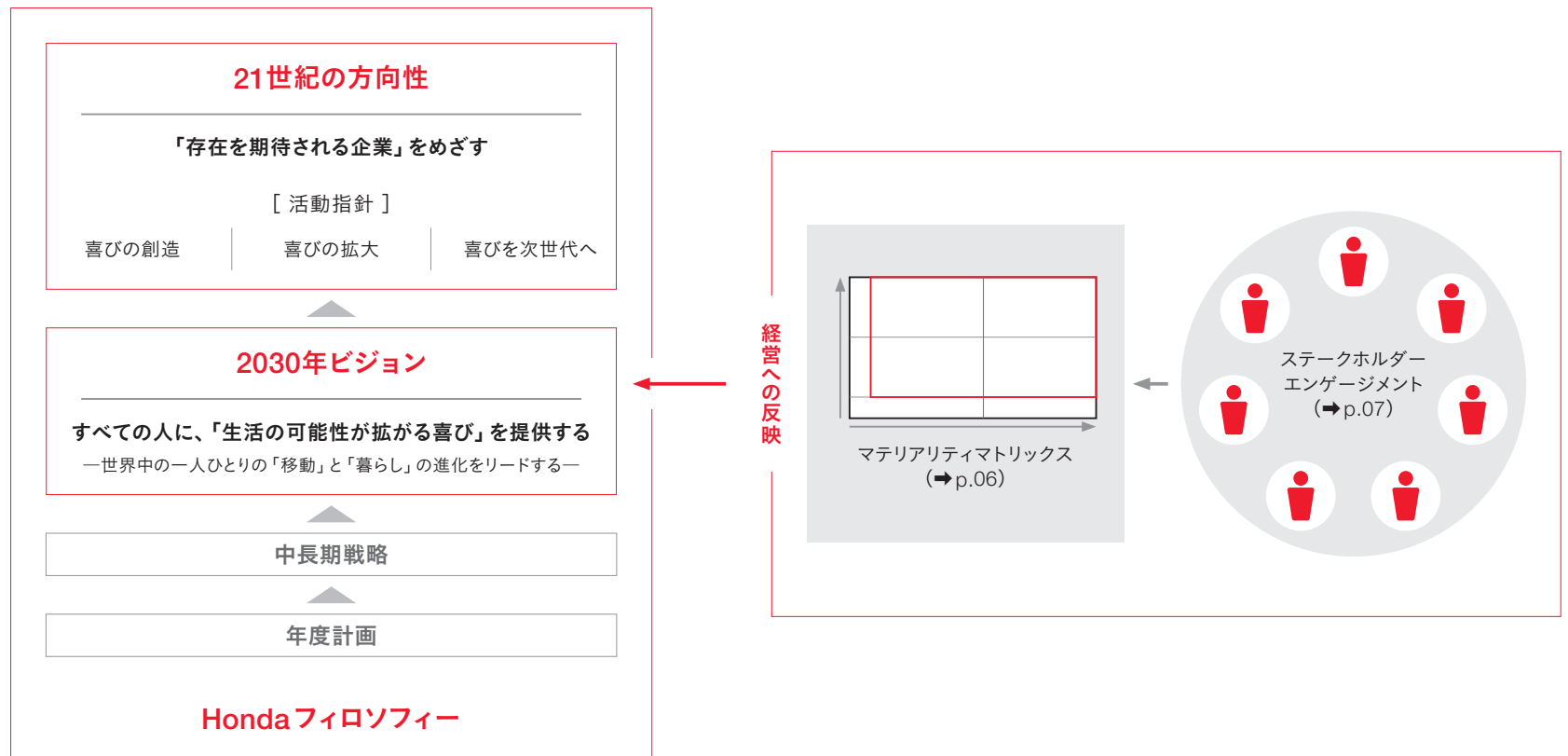
「Hondaフィロソフィー」は、Hondaグループすべての企業と、そこで働くすべての従業員の価値観として共有され、あらゆる企業活動と、従業員の行動や判断の基準となっています。

さらに、企業の成長機会の創出とサステナブルな社会の実現を両立させるため、21世紀の方向性として「存在を期待される企業」を掲げ、「喜びの創造」「喜びの拡大」「喜びを次世代へ」という取り組みを推進しています。

これらの実現に向けて、Hondaが進むべき方向性を具体的に示したマイルストーンが、「2030年ビジョン」です。

Hondaのサステナビリティにとって重要なことは、商品・サービスを通じた価値の提供によってステークホルダーの期待・要請に応えるとともに、環境や社会に対する影響への配慮など、企業の社会的責任を果たすことや、事業活動を通じて社会課題の解決に貢献することです。

そこでHondaでは、ステークホルダーとHondaの両視点を踏まえて、中長期の事業戦略を策定しています。2つの視点を整理するにあたっては、「マテリアリティマトリックス」をガイドに、グローバルの地域ごとの特色に照らし合わせ、果たすべき役割や貢献すべき点を考慮しています。



2 Hondaのサステナビリティ

基本的な考え方 …… 04

> サステナビリティマネジメント体制 …… 05

マテリアリティ …… 06

ステークホルダー

エンゲージメント …… 07

Hondaの取り組みと

SDGs …… 10

外部からの評価 …… 12

サステナビリティマネジメント体制

サステナビリティ課題の特定と推進体制

Hondaは、内外環境認識を踏まえた全社の方向性と、コーポレートとして取り組むべき重要課題を合意することを目的として、最高経営責任者（CEO）を議長とした「コーポレート統合戦略会議」を設定しており、その中でサステナビリティ課題への方針や取り組みの議論・検討を行っています。

今後も「フィロソフィーに根ざした企業活動全体を世の中に示していくことで存在価値を高め、社会からの正当な評価につなげる」といった活動を継続しながら、サステナビリティ視点を反映した全社戦略を立案していきます。

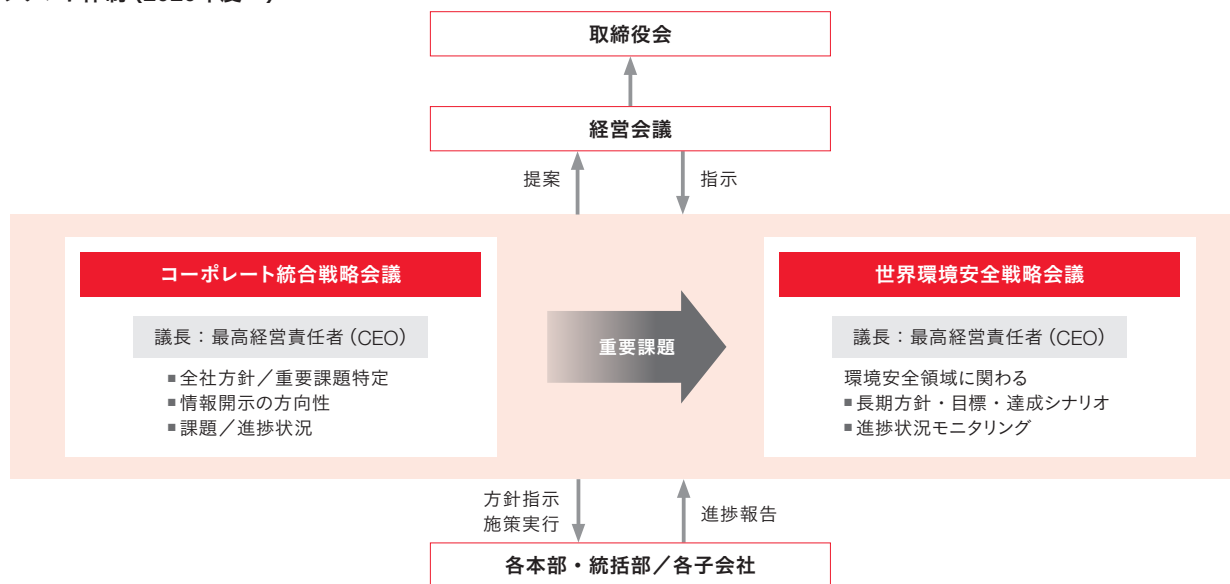
また、モビリティカンパニーとして最重要課題である環境安全領域のさら

なる推進強化として、CEOを議長とした「世界環境安全戦略会議」を設定しています。

環境領域の戦略には気候変動対応も含まれており、世界環境安全戦略会議において定めたCO₂排出量の削減目標については、取締役会で決定されています。

これらの会議体で検討された重要課題を踏まえて、経営会議や取締役会で全社戦略を決定し、各本部・統括部、各子会社の方針・施策として実行しています。

サステナビリティマネジメント体制 (2020年度～)



2 Hondaのサステナビリティ

基本的な考え方 04

サステナビリティマネジメント体制 05

> マテリアリティ 06

ステークホルダーエンゲージメント 07

Hondaの取り組みとSDGs 10

外部からの評価 12

マテリアリティ

ステークホルダーの視点を踏まえた課題評価

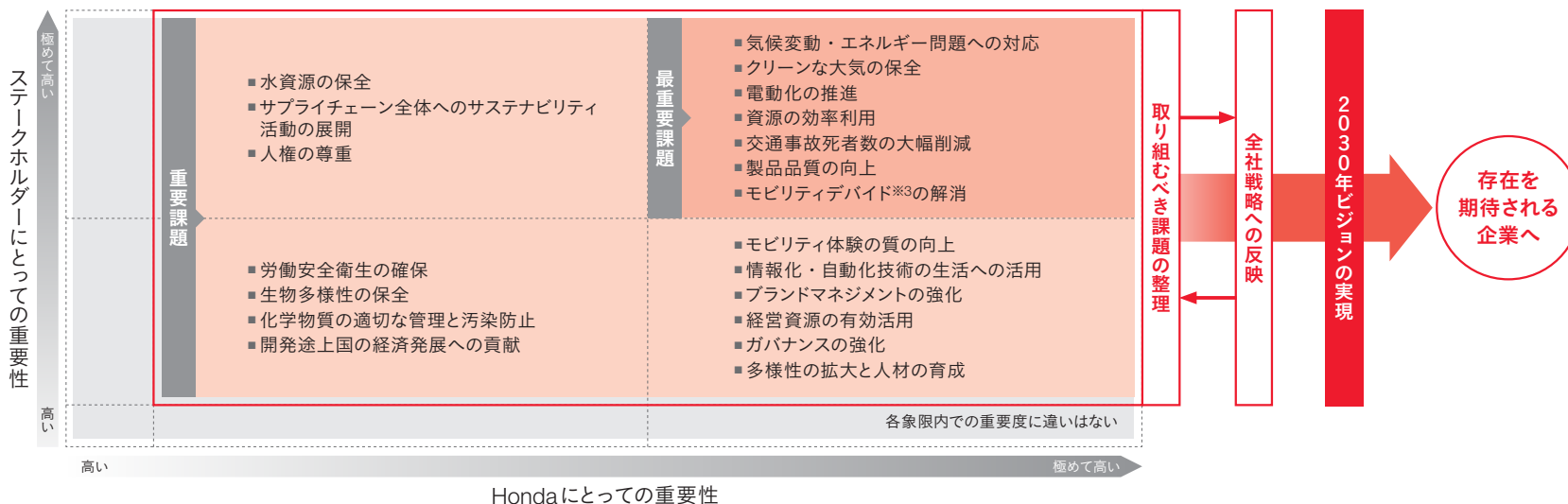
Hondaフィロソフィーを基点とした長期ビジョン達成に向けては、取り組むべき重要な課題をHondaとステークホルダーの2つの視点から整理しています。「マテリアリティマトリックス」はそうした課題を整理するための代表的なフレームワークであり、これを作成・活用することで、課題の網羅性を確認し、位置付けを明確化しました。

マテリアリティマトリックスの作成にあたっては、課題の抽出とその重要性の評価という2段階で行いました。課題の抽出は、社内各本部のメンバーによる議論に加え、技術革新の状況、SDGs※1やパリ協定に記された社会課題も踏まえ、グローバルかつバリュー・チェーンの観点で実施しています。そしてこれら課題の重要性について、代表的なESG※2評価機関や、企業の

サステナビリティに精通した欧米のNGOとの対話などを通じて、ステークホルダー視点での評価を行いました。そのうえで、コーポレート統合戦略会議などにおいて、経営メンバーが評価・確認をしています。

こうして、「カーボンフリー社会の実現」や「交通事故ゼロ社会の実現」などを、モビリティカンパニーとして優先的に取り組むべき重要課題として可視化することができました。これらは、SDGsの目標13「気候変動に具体的な対策を」、目標7「エネルギーをみんなに。そしてクリーンに」や目標3「すべての人に健康と福祉を」などの達成に貢献するものと考えています。このように、ステークホルダーの視点を踏まえて特定された重要課題は、ビジョン達成のための全社戦略に反映され、各事業活動へ織り込まれていきます。

マテリアリティマトリックス



※ 1 SDGs: Sustainable Development Goalsの略。2015年に国連持続可能な開発サミットにおいて採択された貧困や飢餓、エネルギー、気候変動、平和的社会などに関する国際目標。

※ 2 ESG: Environment (環境)、Social (社会)、Governance (ガバナンス)の略。

※ 3 モビリティデバイド: 移動手段の違いによる人の生活の格差。

2 Hondaのサステナビリティ

基本的な考え方 04

サステナビリティマネジメント
体制 05

マテリアリティ 06

> ステークホルダー
エンゲージメント 07

Hondaの取り組みと
SDGs 10

外部からの評価 12

ステークホルダーエンゲージメント

基本的な考え方

Hondaが社会から「存在を期待される企業」となるためには、コミュニケーション・サイクルを実践していくことが必要です。それは、① Hondaがどのような価値を社会に提供しようとしているのかを適宜・的確に伝え、② 多様なステークホルダーのHondaに対する要請や期待を把握・理解し、③ 具体的な施策に落とし込み、④ その評価を受ける、という仕組みです。

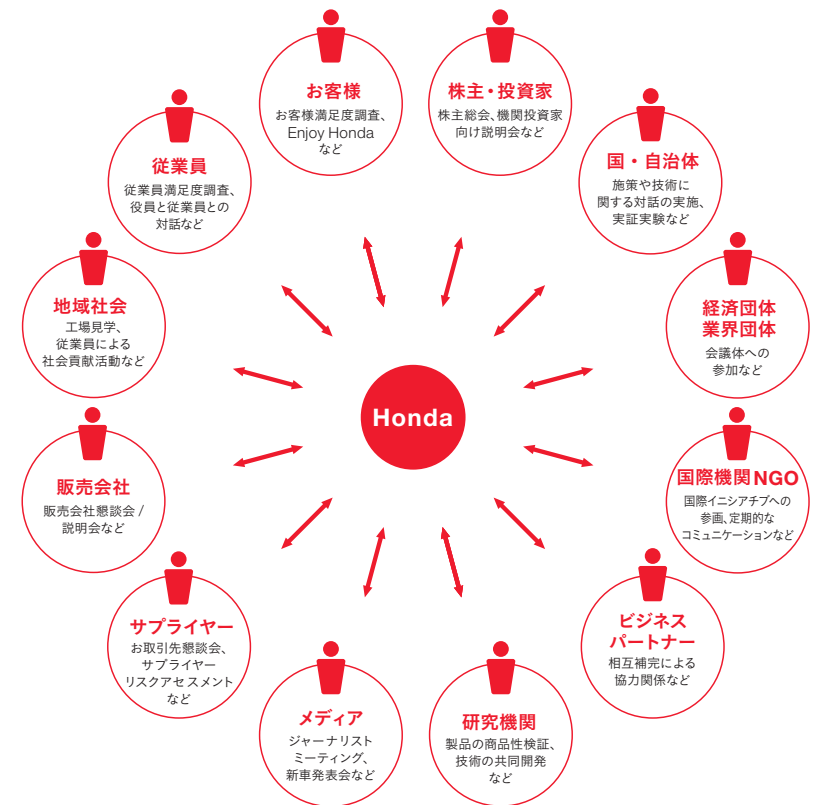
とりわけ近年は、事業の規模拡大やグローバル化に加え、ITの急速な普及によって、企業活動が社会に及ぼす、また社会が企業に及ぼす影響の大きさや範囲が広がっており、そのスピードも加速しています。そんななか、「ステークホルダーとの対話」は、Hondaの取り組みに対するより正しい理解につながるとともに、社会環境の変化やリスクを把握できる有益な手段でもあると考えています。

こうした認識のもと、Hondaはグローバルで、さまざまな機会を通じて対話を実施しています。この対話は、Hondaのステークホルダーのなかでも、右図の主要なステークホルダー（Hondaの事業活動により影響を受ける、もしくはその行動が事業活動に影響を与えるもの）と、社内各部門との間で行っています。

例えば、株主・投資家とのエンゲージメントでは、シェアホルダー（株主）リレーションズと、インベスター（投資家）リレーションズを通じて、Hondaをより正しく理解してもらえよう対話を行っています。

また、代表的なESG評価機関やNGOとの対話から得られた意見を「マテリアリティ分析」（➡p.06）に反映させ、Hondaが取り組むべき課題の特定に役立てています。

ステークホルダーエンゲージメント



2 Hondaのサステナビリティ

基本的な考え方 …… 04

サステナビリティマネジメント

体制 …… 05

マテリアリティ …… 06

> **ステークホルダー
エンゲージメント** …… 07

Hondaの取り組みと

SDGs …… 10

外部からの評価 …… 12

ステークホルダーエンゲージメント

2022年度における取り組み例

| ステークホルダー | 主な対話方法 | 概要 | 頻度 | 対応するマテリアリティ マトリックス項目 | 窓口 | 参照 |
|-----------|------------------|---|----------|---------------------------------------|-----------------|---|
| お客様 | お客様満足度調査 | 世界中の顧客の満足のため、全世界の各販売店でアフターサービスを受けたお客様に対し、顧客満足度についての調査を実施し、質の高いサービスオペレーション実施の改善活動を行っています。 | 毎年 | ブランドマネジメントの強化 | 顧客担当部門 | →p.55 |
| 株主・投資家 | 決算説明会 | 決算概況、取り組みなどについて、記者会見、Web会議を開催しています。得られたご意見、ご要望を参考に企業価値の最大化に取り組んでいます。 | 年4回 | | 財務部門 | https://www.honda.co.jp/investors/ |
| | 個別説明・カンファレンス参加 | 経営状況、生産、研究開発、事業戦略の説明や、意見交換を実施しています。得られたご意見、ご要望を参考に企業価値の最大化に取り組んでいます。 | 通年 | | | |
| サプライヤー | お取引先懇談会 | 事業の方向性や取り組み内容をサプライヤーと共有する懇談会を、定期的に開催しています。全社方針や購買方針の発信とQCDD*などの各領域において、とくに優れた実績を残されたサプライヤーに対し、感謝賞を贈呈しています。懇談会終了後には、出席者に対しアンケートを実施し、満足度や次回イベントに活かすための改善点の把握を行い、さらなる充実に向けた活動を行っています。 | 毎年 | 製品品質の向上 サプライチェーン全体へのサステナビリティ活動の展開 | | →p.102 |
| | 事業計画懇談会・事業状況共有会 | 中長期経営方針、事業計画、サステナビリティ案件 (ESG / コンプライアンス・ガバナンス / リスクアセスメント) に関する情報を共有します。 | 毎年 | 製品品質の向上 サプライチェーン全体へのサステナビリティ活動の展開 | 購買部門 | |
| | サプライヤーへのESG調査の実施 | 「Hondaサプライヤーサステナビリティガイドライン」(→p.90)に基づき、コンプライアンス違反等の未然防止、環境負荷低減実現のため、主要サプライヤーへのESG調査を実施しています。 | 毎年 | サプライチェーン全体へのサステナビリティ活動の展開 ガバナンスの強化 | | →p.95 |
| 経済団体・業界団体 | 業界団体活動への参画 | 業界団体活動を通じて社会の期待・要請を把握し、持続可能な事業環境を整え社会に貢献すべく、各種会議体に参加しています。 | 通年 | | 渉外部門、ほか | |
| 国際機関・NGO | 国際イニシアチブへの参画 | 持続可能な社会の実現に向けた、期待・要請の把握と貢献をめざし、各種会議体に参加しています。 | 通年 | | サステナビリティ企画部門、ほか | |
| 地域社会 | 安全運転普及活動 | Hondaは、グローバル安全スローガン「Safety for Everyone」を掲げ、事故を未然に防ぐために安全運転支援技術とともに「人から人への手渡しの安全」と「参加体験型の実践教育」を基本として、運転者だけではなく、子どもから高齢者まで、交通社会に参加するすべての人を対象とした交通安全啓発活動に積極的に取り組み、現在では、世界43の国と地域で活動を行っています。 | 通年 | 交通事故死者数の大幅削減 | 安全運転普及担当部門 | →p.34 |
| | お身体の不自由な方々の運転復帰 | 移動手段の選択肢を広げて、社会参画への格差を少なくしたいと考え、福祉車両(運転補助装置)を提供するとともに、運転復帰を望む方々の支援のため、地域での支援環境確立に向け、作業療法士をはじめとする方々のサポートをしています。 | 通年 | モビリティデバイドの解消 | | →p.40 |
| | ビーチクリーン活動 | 独自開発した機材を使用し、Hondaグループが地域の参加者とともに砂浜の清掃活動。2006年より活動を開始して以来、これまでに全国各地の砂浜で活動を行い、実施回数は406回、回収したゴミは総量約520tにのぼります。 | | | | 社会貢献活動推進部門 |
| | 里地里山保全活動 | 東京都八王子市と活動協定を締結し、従業員とその家族が八王子市の「上川の里特別緑地保全地区」での里地里山保全活動を実施しています。 | 通年 | | | |
| 国・自治体 | 被災地支援 | 災害時の被災地への製品支援・寄付を行っています。 | | | 社会貢献活動推進部門、ほか | https://www.honda.co.jp/philanthropy/saigai/ |
| 従業員 | 活力度測定 | より働きやすい職場づくりのため、従業員のエンゲージメントの測定と向上に向けた取り組みを行っています。 | 活力度測定：毎年 | 多様性の拡大と人材の育成 | 人事部門 | →p.80 |

※ QCDD: Quality (品質)、Cost (コスト)、Delivery (調達)、Development (開発)、Environment (環境) の略。

2 Hondaのサステナビリティ

基本的な考え方 04

サステナビリティマネジメント
体制 05

マテリアリティ 06

> **ステークホルダー
エンゲージメント** 07

Hondaの取り組みと
SDGs 10

外部からの評価 12

ステークホルダーエンゲージメント

外部団体との協働

Hondaは、グローバルなモビリティカンパニーとしての責任を果たしていくために、政府をはじめ経済団体や業界団体との対話を推進するとともに、外部団体との協働を行っています。日本においては、一般社団法人日本自動車工業会の副会長職や委員会委員長職、一般社団法人経済団体連合会の委員会委員長職、東京商工会議所の副会頭職や委員会委員長職を引き受けています。

また、IMMA※1やOICA※2といった二輪車、四輪車の国際団体においても、委員会、作業部会の議長を各業界団体の代表を務めています。さらにWEF※3や、WBCSD※4への加盟を通じて、サステナビリティに関するイニシアチブとも協力しています。

なお、Hondaの各地域における事業執行にあたっては、各地域が自立性を高め、迅速な意思決定を行うため、一定の範囲内で権限を委譲しています。政治献金※5を行う場合は、各国の法令に基づき、社内の必要な手続きを経て行っています。

※ 1 IMMA：International Motorcycle Manufacturers Association（国際二輪車工業会）の略。
※ 2 OICA：Organisation Internationale des Constructeurs d'Automobiles（国際自動車工業連合会）の略。
※ 3 WEF：World Economic Forum（世界経済フォーラム）の略。
※ 4 WBCSD：World Business Council for Sustainable Development（持続可能な開発のための世界経済人会議）の略。
※ 5 献金先：一般財団法人国民政治協会。政治献金額：2019年度：25百万円、2020年度：25百万円、2021年度：25百万円。なお、この支出は「Honda 贈収賄防止ガイドライン」に抵触しないことを確認しています。

適切な広告・宣伝活動

Hondaは、お客様や社会からの信頼と期待に応え続けるため、誠実に広告・宣伝や販売促進活動を行います。

また、正しく商品の広告・宣伝や販売促進活動を行うことで、お客様に誤解を与えることのないよう取り組んでいます。

2 Hondaのサステナビリティ

- 基本的な考え方 04
- サステナビリティマネジメント体制 05
- マテリアリティ 06
- ステークホルダーエンゲージメント 07
- > Hondaの取り組みとSDGs 10
- 外部からの評価 12

Hondaの取り組みとSDGs

SDGsへの貢献

Hondaはステークホルダーの皆様と喜びを共有するために、時代のニーズを先取りした世の中に役立つ独自の技術で、モビリティ社会の発展に貢献することをめざしています。

この考え方はSDGsの目標9「産業と技術革新の基盤をつくろう」、目標12「つくる責任 つかう責任」や目標17「パートナーシップで目標を達成しよう」の達成に通じるものであり、Hondaの企業活動全般に関わるものとなっています。

ます。

また、Hondaは経済的な価値を追求しながら、社会への価値を創出していくことが、持続可能な経営にもつながり、ひいては社会の持続可能性にも貢献できるものと考えています。

2030年ビジョンの実現に向けた重要課題（⇒p.06）に基づき、企業活動を通じて「持続可能な開発目標（SDGs）」にも貢献していきます。

最重要課題ごとの取り組み

| 最重要課題 | Hondaの取り組み | 達成に貢献するSDGs目標 |
|------------------|--|---|
| 気候変動・エネルギー問題への対応 | 地球環境負荷ゼロ達成に向けた取り組み（⇒p.17） 気候変動・エネルギー問題への対応（⇒p.18） 物流に関する取り組み（⇒p.99） サプライヤーとの環境負荷低減（⇒p.92） | 2 気候変動に 対応する 7 気候変動に 対応する 9 産業と技術革新の 基盤をつくらう |
| 電動化の推進 | 電動化の推進（⇒p.20） | 11 住み続けられる まちづくりを 13 気候変動に 対応する |
| クリーンな大気の保全 | クリーンな大気の保全（⇒p.25） | 7 気候変動に 対応する 13 気候変動に 対応する |
| 資源の効率利用 | 資源の効率利用（⇒p.22） | 11 住み続けられる まちづくりを 12 つくる責任 つかう責任 |
| 交通事故死者数の大幅削減 | 事故に遭わない社会へ（⇒p.34） | 3 気候変動に 対応する 11 住み続けられる まちづくりを |
| モビリティデバイドの解消 | Hondaのサステナビリティ（⇒p.04） | 11 住み続けられる まちづくりを 17 パートナーシップで 目標を達成しよう |



2 Hondaのサステナビリティ

- 基本的な考え方 04
- サステナビリティマネジメント体制 05
- マテリアリティ 06
- ステークホルダーエンゲージメント 07
- > Hondaの取り組みとSDGs 10
- 外部からの評価 12

Hondaの取り組みとSDGs

最重要課題ごとの取り組み

| 最重要課題 | Hondaの取り組み | 達成に貢献するSDGs目標 |
|---------------------------|---|---|
| 水資源の保全 | 水資源の保全 (⇒p.26) | 6 安全な水とトイレを世界中に |
| サプライチェーン全体へのサステナビリティ活動の展開 | サプライチェーンのサステナビリティ強化に向けて (⇒p.88) サプライヤーとの環境負荷低減 (⇒p.92) | 8 働きがいも 経済成長も 13 気候変動に 具体的な対策を 16 平和と公正な 世界を築くために |
| 人権の尊重 | 人権 (⇒p.67) 人権方針 (⇒p.146) ダイバーシティの取り組み (⇒p.71) | 5 ジェンダー平等を 実現しよう 8 働きがいも 経済成長も 16 平和と公正な 世界を築くために |
| 経営資源の有効活用 | Hondaのサステナビリティ (⇒p.04) | 8 働きがいも 経済成長も |
| ガバナンスの強化 | コーポレートガバナンス (⇒p.111) | 16 平和と公正な 世界を築くために 12 つくべき責任 つかう責任 |
| 多様性の拡大と人材の育成 | 人総合力の発揮に向けた多様性の進化 (⇒p.69) ダイバーシティの取り組み (⇒p.71) | 4 質の高い教育を みんなに 5 ジェンダー平等を 実現しよう 8 働きがいも 経済成長も 10 人や国の不平等を なくそう |
| 労働安全衛生の確保 | 労働安全衛生 (⇒p.81) | 8 働きがいも 経済成長も |
| 生物多様性の保全 | 生物多様性の保全 (⇒p.27) | 14 海の豊かさを守ろう 15 陸の豊かさも 守ろう |
| 化学物質の適切な管理と汚染防止 | 化学物質の管理と削減 (⇒p.27) | 3 気候変動に 具体的な対策を 6 安全な水とトイレを 世界中に |
| 開発途上国の経済発展への貢献 | 2030年ビジョン (⇒p.04) | 1 貧困をなくそう 4 質の高い教育を みんなに |

※ OJT: On the Job Training (オン・ザ・ジョブ トレーニング) の略。

2 Hondaのサステナビリティ

基本的な考え方…………… 04

サステナビリティマネジメント
体制…………… 05

マテリアリティ…………… 06

ステークホルダー
エンゲージメント…………… 07Hondaの取り組みと
SDGs…………… 10

> 外部からの評価…………… 12

外部からの評価

企業の持続可能性の指標

「Dow Jones Sustainability World Index」の
構成銘柄に選定

2022年12月、Hondaは社会的責任投資の代表的な指標であるDJSI※1の評価において、全世界における自動車セクターの上位5社に入り、「Dow Jones Sustainability World Index」の構成銘柄に6年連続で選定されました。また同時に、アジア・太平洋地域の「Dow Jones Sustainability Asia/Pacific Index」の構成銘柄に8年連続で選ばれています。

DJSIは、米国のS&P ダウ・ジョーンズ・インデックス社によって運営されている投資指標です。経済・環境・社会の3つの側面から世界の主要上場企業のサステナビリティを評価し、総合的に優れた企業を構成銘柄として選定しています。

Member of
**Dow Jones
Sustainability Indices**
Powered by the S&P Global CSA

S&P Global社の「The Sustainability
Yearbook – 2023 Rankings」において
「Top 10%」に選定

HondaはS&Pグローバル社のSustainability Yearbook 2023において、「Top 10%」に選定されました。S&Pグローバル社は経済・環境・社会の側面で評価を行い、とくに優秀なサステナビリティ先進企業を選定し、「Sustainability Yearbook」に掲載しています。

2023年は61のセクターで世界7,800社以上を対象に評価を実施し、708社が選定されました。

Hondaが属する「Automobiles」セクターでは、「Top 1%」1社、「Top 5%」0社、「Top 10%」3社が選定されました。

なお同評価は、昨年までの「Gold Class」「Silver Class」「Bronze Class」から、「Top 1%」「Top 5%」「Top 10%」へと運用を変更しています。

「CDP 気候変動レポート 2022日本版」において
「B」を獲得

2023年4月、CDPは、世界の大手企業を対象に実施した、各企業の気候変動対策やGHG※2排出量削減への取り組みの調査結果を発表しました。

Hondaは、「CDP 気候変動レポート 2022日本版」において「B」を獲得しました。

CDPは、企業や都市の重要な環境情報を測定・開示・管理し、共有するためのグローバルなシステムを提供する国際的な非営利団体です。

企業の環境問題への取り組みレベルを「情報開示」「認識」「マネジメント」「リーダーシップ」の4段階で評価しています。

CDP評価指標である気候関連財務情報開示タスクフォース (TCFD※3) で要求されている項目については、統合報告書「Honda Report 2022」p.55、p.56、p.57、p.58をご参照ください。

統合報告書「Honda Report 2022」 p.55、p.56

■ https://www.honda.co.jp/sustainability/integratedreport/pdf/Honda_Report_2022-jp-all-m.pdf#page=29

※1 DJSI：Dow Jones Sustainability Indices (ダウ・ジョーンズ・サステナビリティ・インデックス)の略。

※2 GHG：Greenhouse Gas (温室効果ガス)の略。

※3 TCFD：Task Force on Climate-related Financial Disclosuresの略。